

さようなら、友よ

三途リバー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

瑞鶴率いる新生連合艦隊VS一航戦で、高雄がすてがまる話。
時系列的には紅染イベ直前あたりをイメージ

さようなら、友よ

目次

さようなら、友よ

「退かれよ！瑞鶴殿、退かれよ!!」

耳朶を打つ大音声。聞き間違えようのない、絶望的な撤退戦の中でも凛々しく響く親友の声だ。

「何言ってるんのツ!!あなたも退くのを、高雄！一緒に翔鶴姉を助けて、長門様を起こしてっ……!」

迫り来る敵の前で仁王立ちしながら、傷一つない純白の背を見せながら高雄は尚も叫んでいる。

その間にも敵は……一航戦に反旗を翻し、新生重桜を名乗った瑞鶴達を追撃せんとするかつての同胞達が近付く。しかし高雄は一切怯むことなく刀を掲げ、瑞鶴達に向け言葉を紡いだ。

「KAN—SENには……武士には、命の捨て時というものがあるのだ。大切なものを守る時。理想を叶える時。大義を貫く時。そして、世に自身の正義を示す時……。拙者にとって、それら全てがこの一瞬に揃っている!」

「な、にを……なにを、馬鹿なこと言ってるの!翔鶴姉の救出は私の我儘で言い出したことなんだよ!?それならここで私が殿を務めるのが……」

言っていることが理解できない。それではまるで、ここで死ぬと言っているようではないか。自分の為に、ここで代わりに高雄が死ぬと……そう言っているようではないか。

「馬鹿はお主だ!お主は我ら新生重桜海軍の盟主であろう!目的を見失うな、第五航空戦隊・瑞鶴!たとえこの一戦で敗れたとて、お主の不屈の意志がある限り我らの火は消えん!拙者の夢は終わらんのだ!だから……!」

そこで高雄が初めてこちらを振り返る。

柔らかい、どこまでも暖かい笑顔の浮かんだ、瑞鶴の大好きな顔だ。翔鶴が一航戦に捕らわれて以降、誰よりも寄り添ってくれて、誰よりも頼りになって、そして誰よりも前を向いていた親友の、美しい笑

顔。

「拙者の為に、生きてくれ」

「ツ——たか」

お、と名前を呼ぶ間に、霰のような爆撃が彼女を襲った。離れていても思わず目を背けてしまうような爆風の中、高雄の咆哮が海を揺らす。

「悪!!」

爆炎の中から飛び出し、駆け出した勢いそのまま艦載機を次々に切り落としていく。まるで紙飛行機のように細切れになっていくそれらに目もくれず、高雄は更に歩を進めていった。

「即!!!」

黒匣で操っているセイレーンの量産艦に、身体ごとぶつかる勢いで突貫し、土手っ腹から突き抜ける。ただ、刀で突きを繰り出しただけ。単純な近接攻撃が、KAN—SENの力と彼女の弛まぬ努力によって一撃必殺の威力を誇っている。尚も高雄の勢いは止まらない。

「斬!!!」

堪らず前に出てきた敵のKAN—SENと高雄が直接刃を交わしたところで、瑞鶴は自身の袖を引く存在に気が付いた。

「綾、波……」

「瑞鶴さん、行くです。高雄さんは瑞鶴さんに全ての希望を託しました。それは綾波達も同じです。瑞鶴さんがここで立ち止まるのは、高雄さんに対する裏切りです」

左腕に傷を負い、肩を大きく上下させながらも強い意志の籠った視線が瑞鶴を貫く。後悔も逡巡も認めない、ただただ折れるなという冷酷とも言える諫言。だが噛み締めた唇は血で濡れ、仲間を喪うという現実に必死に耐えている

「……………撤退、しよう…高雄の理想…高雄の正義を、ここで絶やさない為に…!!私達は、絶対っ…!!」

「はいです。……………泣くのは、後にしましょう」

年下の綾波にそう言われても尚、瑞鶴は溢れる涙を止めることが出来ないでいた。

満身創痍の高雄に、薙刀の斬撃と共に悲痛な叫びを投げかけるのは伊勢。戦場に主義主張を持ち込まぬ明朗快活な女が、思わずその切っ先を鈍らせるほどに高雄の在り方は美しかった。

「ぐうツ…!!」

「死ぬこたアない！ 臙装捨てて降伏しな！ アタシが赤城に口利きするさ！ なんなら一発ぶんなぐったって良い！ アタシを信じて、ここは折れちゃくれないか!？」

「伊勢め、勝手なことを…」

彼女がなんと吠えたところで、赤城は瑞鶴一派を決して許しはしない。国を強固に、ひとつに纏めんと血眼になる彼女が下す判断は良くて雷撃処分、妥当なところで引き回しの上獄門だ。

「それに、そんな懇願が意味を為さないことなぞ分かりきっているだろうに」

理想に燃えて、他人の夢を信じきって、そうして死地に飛び込んで。

誰かのために命を懸けるこの堅物が、受け入れる筈がないだろう。

高雄の勇姿を、志を。同じ武人として理解し、穢したくないと言うならば――

「退け、伊勢！ その愚か者は……大罪人は、私自らここで八つに裂く!! 貴様如きが出る幕ではないわ!」

「ツ……うるツせえな!! 政治屋は黙ってる!! てめえに言われなくても、ケツ叩かれなくてもよお!! ダチの介錯は、アタシが手ずからしてやらア!!」

伊勢の暴言に若い衆がざわつくが、加賀はそれを咎めない。

漸く本気で得物を振るい、涙を振り払った正直者の姿を一瞥し、踵を返した。

「よ、よろしいのですか？ 伊勢さん一人にお任せしても…」

「くだらんことを聞くな、駿河。手負いの獣に拘らうほど私は暇ではない。アレ程度、伊勢で充分対処できる」

「は、はあ？ さつきと言ってることがまぎや……く……」

新入りの言葉が途切れたのは、加賀の握り締めた拳から滴る赤色に気が付いたからか。だがそんなことをいちいち気にしているほど、今

の加賀に余裕はない。

『貴殿の理想に一から百まで賛同はできぬ。だがしかし、貴殿の在り方は好ましい。露悪的に振る舞いながら、誰よりもこの国を想う不器用者を嫌いになれる筈がなからうよ』

(不器用はどちらだ……嫌いになれぬのは、どちらの方だ……)

「さらばだ、高雄。重桜最後の武人。我が最後の朋輩」

認めてくれた、認めていた裏切り者^友に背を向け加賀は歩む。

その先にこそ、恩師が望んだ重桜の未来があると信じて。